浜本純逸氏著『戦後文学教育方法論史』

一

四〇〇ページをこすこの労作に、わたしは浜本氏の青春の投影をみる。「あとがき」によれば、大学三年（昭和33年）のとき、中・四国学生ゼミナールに参加するため、に文学教育に関する百数十枚のレポートを、「高国」の同級生と作成したことがあるという。そのときから二〇年ののち、本書『戦後文学教育方法論史』が誕生したのである。〈あのときの青春の燃焼は忘れられない〉とあるから、その間、氏の胸中に埋み火の如く、文学教育史研究への情熱が秘められていたわけである。

氏の青春は、そのまま文学教育の青春でもあった。昭和三〇年代の半ば、高校の文学教育状況は、ひじょうな昂揚期にあった。「高国」の学生として著者は、同時代にあってその昂まりを感受しえているのである。この出合いは、著者にとって大きな意味をもつことになったと思われる。当時、話題となっていた高校の文学教育実践とは、たとえば次のような記録であった。――益田勝実「文学教育の問題」（昭27）、荒木繁「民族教育としての古典教育」（昭28）、大河原忠蔵「頽廃とたたかう文学教育」（昭30）、益田勝実「しあわせをつくりだす国語教育」（昭30）など。

わたし自身、文学教育に興味をもつようになって、この時期の実践記録から受けた衝撃は新鮮なものであった。高校の文学教育の問題作が、この期ほど集中的に問われたときは他にないとさえいえる。百数枚もの報告書を作成しながら、浜本氏ら「高国」の先輩たちが、それら日文協（日本文学協会）のエネルギッシュな青年教師の記録の中に、みずからの指針をみいだしていたであろうことは想像にかたくない。

本書において、この期の実践に対し、七〇ページ余り（第Ⅳ章、第Ⅴ章）にわたって力づよく論究されているのをみても、著者の内部にその頃の〈青春の燃焼〉の投影をみることが可能である。浜本氏より一〇年おくれて「高国」の学生となった私たちが、七〇年の嵐の中で、いわゆる教育実践無用論の余波にうちひしがれたまま何一つ実践的指針をもちえないでいたのとは対照的である。文学教育の青春期に立ちあえたことは、本書にあふれる著者の論述の力づよさと無縁ではないだろうと思う。

二

本書の構成は、次のとおりである。

序章　戦後文学教育史研究の概観
Ⅰ章　敗戦直後の文学教育
Ⅱ章　文学教育への志向
Ⅲ章　経験主義国語教育の批判と文学教育
Ⅳ章　問題意識喚起の文学教育
Ⅴ章　読者の定位への試み
Ⅵ章　読解指導と読み方指導の中の文学教育
Ⅶ章　文学教育運動の展開(一)
Ⅷ章　読書指導と文学教育
Ⅸ章　文学教育運動の展開(二)
Ⅹ章　戦後の文学教育実践の到達点
むすび　戦後文学教育の達成
（戦後文学教育史年表）

本書は、季刊『文芸教育』誌（明治図書）

に三年半にわたって連載（10号～19号）されたものを中心にまとめられている。研究対象の限りない拡がりをもつ教育史研究という仕事からすれば、本書に注がれた三年半の歳月は決して長いとはいえないが、それだけに、著者の研究的力量の蓄積の深さをうかがわせている。

著者の研究姿勢を知るには、次の一節がてがかりとなる。

〈それぞれの時代状況の中で、その状況を乗りこえようとしてなされた実践や理論化が歴史を方向づけたのであるが、それらの実践や理論化については、可能なかぎり混沌とした生成過程に目を向けようとした。文学教育史上の成果よりも、その生成過程に歴史を動かしていくエネルギーを見い出そうとしたのであり、今後の文学教育運動に根源的な力を与えるものをとり出そうとしたからである〉（あとがき）。

この研究姿勢は、本書の全編をつらぬく特色となっている。本書執筆の意図は、ここに明らかである。いずれの文学教育論についても、時代状況とのかかわりがもっとも重視され、そのかかわりの中で理論として成熟していくさまがつぶさに考察されている。各章とも、教育をとりまく状況分析からときおこされているのでもそれと知れる。ついで各理論の成立過程がたどられ、さいごに各理論の特質と問題点がえぐりだされていく、この論述の方法も一貫している。こういった研究視点・論述方法の明確さは、研究活動の一方で、現在の文学教育運動のにない手として活躍している著者の実践志向から生まれたものといってよい。

三

これまで、戦後の文学教育史を調べようとすると、まとまった文献として『戦後文学教育研究史（上下）』（日本文学教育連盟編、未来社、昭和37・8）しかなかった。この文献はしかし、昭和27年から36年までの関係論文をあつめた資料集でしかなかった。それに対し本書は、終戦直後から昭和45年までの二五年間という、文学どおりの「戦後」をその射程距離に入れている。しかも通史的にたどれるような配慮もなされている点で、戦後文学教育史研究の決定版といってよいかと思う。

また、歴史研究の成果としてみるとき、本書は、戦前の文学教育の歴史研究として唯一の、久米井束氏の『日本の文学教育』（鳩の森書房、昭和50・9）をひきつぐものであり、明治・大正・昭和の方法論史研究として定評のある、飛田多喜雄氏の『国語教育方法論史』（明治図書、昭和40・3）の姉妹篇の位置にある。したがって、これ以後、戦後の文学教育の歴史を語る場合、本書をぬきにはありえない。

と同時に、わたしたちに残された課題もないではない。資料、文献への目くばりの広さは、本書の歴史研究書の性格を重厚なものとしているが、それでいてなお、浜本氏が次のような告白を残している点にも注目すべきであろう。〈いまになって、ことばでしか歴史を語れないということの限界を痛感している。……文学教育の場合、歴史を動かすような授業や研究報告が多くあったにちがいない。それらが文字化されていないことによって、歴史にとりこめないという限界があった〉。

この率直な自戒のことばは、本書以後、文学教育史研究の上でどのような研究が残されているか、その方向を示唆しているといえよう。語られざる歴史の発掘研究は、昨今のドキュメンタリー領域での重要な課題となっているが、たとえば「聞き書き」のような形で

の、文学教育事実の地味な発掘の仕事などがある。文学教育の歴史研究、地方史研究の分野で可能となっていくものと思われる。また、本書の「序」において、野地先生は、本書以後の研究領域として、「教材別の文学教育実践史」「学校種別（幼・小・中・高・大）での文学教育史」を挙げておられる。これなども、わたしたちに残された研究課題である。いずれにしても、本書『戦後文学教育方法論史』が、これからの文学教育研究の礎石となっていくことは疑いを入れないところである。（昭和53・9、明治図書刊。四三六ページ。四二〇〇円）　（足立悦男）